

SAMUELSON

DALLAS DARRAS

LOST AND REGAIN
POUR ET CONTRE 1879-1880
ESCALATOR // BAY SIDE LINE

EYES WIDE SHUT PG-17
MOTION STOP, CUT OFF
WALKER IN THE ASYMMETRY



9 番シアターで

ヤスキは缶ビールを何本飲みほしたかわからなくなってから、ようやく決意を固めて依子に電話をする。(もう日付は変わっていたが) 明日映画を観に行く提案をし、依子は二つ返事で了承をし、そのまま通話は終わる。それから崩れ落ちるようにしてヤスキは布団に潜って眠りこける。翌朝最悪の気分が目覚めたヤスキは空き缶を洗い、パンを口に詰め込み、頭がうまく回らないまま適当に服を選び外へ出る。

昼過ぎに池袋駅の改札前で待ち合わせ、約束の十分前に二人は揃った。ヤスキの表情は疲れを隠せていなかったが、依子はそれ以上にひどい有様だった。お互い今にも眠りそうな顔を見合わせた。

「何かあったの？」ヤスキが質問をすると依子はフンと鼻を鳴らした。

「一人で飲んだ、吐きそう」依子にはこりともせず answers。行き先は小さな映画館で、何度も二人で行ったことのある場所だった。例え何も言わずとも、例えどれだけくたびれていようと、彼らはその映画館までの最短ルートですたすと進んでいくことができた。駅周辺の賑やかな空気を抜け、薄暗い路地に入ると一気に音数が減らされていく。もともと湿気の多い一日だったが、路地の窮屈さも相まってヤスキはだんだん汗ばんできた。安っぽい風俗の店の数々を通過すると、中ぐらいの高さのビルの下にある銀色のエレベーターが見えてくる。それが映画館の入口だった。ビルの外には映画のポスターやら政党のポスターやらが貼られていたが、どれも変色して今にも消え去りそうな様相だった。

上へ登るボタンを押して、やっと二人は立ち止まった。軽い音をたてて、依子はアルコールの匂いのする息を吐いた。上を向いていたエレベーターの矢印はしばらくしてから下を向き、しかしそこからヤスキにはとてもとても長く感じられた。エレベーターが降りてくるまでにヤスキは隣にいる依子のことを考えていた。黙って待っていると、世界には二人以外の生物がないような錯覚に陥った。事実、セミの声も、人の声も、足音すらもヤスキの意識には届いていなかった。ヤスキ達が背にしているビルの入口は開けはなたれているにもかかわらず。

二人きりで映画を何度見ようと、それをヤスキは慣れることはなかった。むしろ回数を重ねるたびに、ヤスキの緊張は増していった。半袖の「シャツと背中 of 皮膚の間を、汗の滴がゆっくりと降りていくのをヤスキは感覚だけで追っていた。汗よりも先にエレベーターが地上に降りてきて、重い動作で扉が開き、ホコリ臭いカーペットのような匂いが流れ出してくる。エレベーターに乗り込む動作で揺れた「シャツが汗を吸い、四階のボタンを押して

扉が閉まる。

ヤスキはエレベーターの壁に貼ってあった貼り紙を眺めた。二階と三階は個人の指導塾が占拠し、四階には映画館があり、五階にはエステがあり、六階は黒く塗り潰され、七階は居酒屋があった。もちろんヤスキの興味をひくものは四階だけであるし、その貼り紙を精査する必要などこれっぽっちもなかった。壁に寄りかかってデジタル表記の階数が増えていくのを見つめていた依子は、何か面白いものでもあるのだろうかとヤスキと視線の先を合わせたが、貼り紙から依子がヤスキの思惑を読み取ることはできなかった。

短い金属音を鳴らしてエレベーターが止まり、扉が開くと空調の涼しい空気が滑り込んできた。券売機でチケットを二枚購入し、依子はキャラメルポップコーンのMサイズを購入し、壁際のソファに腰掛けた。座るやいなや、依子は長いため息を漏らした。それを聞いてヤスキが笑った。

「おっさんみたいだ」ヤスキは向こうの壁にあるポスターに視線をちらつかせながら話かけた。

「仕方ない。眠いし、暑いから」依子はなるべくキャラメルのコーティングが少ないものを選んで食べ始めた。きつね色がしつかりついている、とびきり甘いやつは最後まで残すのだった。映画館は平日にしては人が少なかった。一人でチラシを物色しているオシャレな男性、机をはさんで向かい合わせに座って談笑している二人の女性、ぴったりと寄り添いあっている老婦人、そして黙ってその様子を観察しているヤスキと依子二人。傍から見れば二人もありふれた大学生の二人組なのだろう。しかしヤスキはそこにいる人間一人一人からどう思われているのが気になってしかたがなかった。映画館を覆うヤスキのその疑心は中心に近づけば近づくほど強くなっていく。

隣にいる依子はヤスキの胸中をなどわかるはずもなく、能天気にも、しかし重苦しうに話し始めた。

「昨日は課題をやっていたんだが、まあ最悪だったね……。メンバーのほとんどのやつがとんずらしやがって、二人で全部作るのはめになったよ。あいつら、今度会ったら産まれてきたことを後悔させてやるんだ……」

「みんなでやるものって大抵そうなるもんだよ」ポニョの入ったバケツを抱える宗介のように依子はポップコーンの箱を抱きしめ、黙りこくってしまった。そこへ突然、中年の男がやってきてヤスキの隣に座り、ジェームズブレイクがいかにして音楽の常識を壊していったのか、大島渚がポルノ映画にどのようなメタファーを忍び込ませたのか、といったことを

話し始めた。ヤスキは聞き役に徹し、男が喋り満足する頃合いを見計らい、今度はヤスキから話し始めた。主にブルース・ビッグフォードのクレイアアニメについて。そしてタルコフスキーの守っている聖性について。その間依子はそしらぬ顔でポップコーンをむしゃむしゃ食べながら壁に貼られていたポスターを観察していた。会話に満足した男はヤスキに名刺を渡して去っていった。ヤスキは受け取った名刺をどうすればいいのかわからず、とりあえずポケットに入れておいた。

入場を始めたことをスタッフが告げると、どちらかが声をかけるでもなく同時に二人は立ち上がる。依子は迷いなく最後列の真ん中からやや左の席をとった。その隣にヤスキが座る。依子はスマホをカバンにしまい、腕時計を外し、薄手の上着を羽織り、ヤスキの方の手に頼杖をついて再びポップコーンを食べ始めた。スクリーンではCMが始まっており、ヤスキはただそこに映るトヨタのエクスクアアが走る様を何の感動もなしに眺めた。CMは続くが照明はフェードアウトし、依子は奥歯でポップコーンを噛み砕き、破片を舌で転がし堪能することだけを考えていた。スクリーンが反射する光が空席だらけのシアターを照らし、ヤスキだけがもどかしい表情をし、依子は大きなあくびをした。

やがて長い長いCMが終わり、シアターが暗転し、ヤスキはその一瞬の闇に安堵した。すぐにスクリーンは再び光を宿して配給を映し始める。光にさらされて、再びヤスキは行き場のない気持ちを持って余したが、すぐに、目を閉じて眠りに落ちるような心持ちで映画に意識を落とした。しかしシアターを出たら最後、ヤスキは映画の内容を忘れてしまっているだろう。彼にはポップコーンを咀嚼する軽い音と自分の脈動しか聴こえていない。

\$\$\$

ポップコーンのなり損ないのタネを箱の底に残したまま、依子は箱を無造作に潰して捨てた。帰りのエレベーターでは二人は横並びに立っていた。今度も言葉を交わさない。言わずとも二人は次の行き先が分かっている。それがいつもの流れなのだ。

横並びになるとヤスキは自然と身長差を意識してしまう。ヤスキと依子は二十センチほどの身長差があり、自分がとても背が高いような、或いは依子の背が低いのか、どうでもいいけれどもどかしい気持ちになる。依子は舌をしきりに動かして、歯の間に詰まったポップコーンの殻をどうにかして取り出そうと躍起になっていた。空調で冷やされた身体も、扉が開けば外気によって溶かされてしまう。そのまま駅前のドトールに向かった。店内は混んでいなかったが、シアターほどの空席ではなかった。すぐさまカフェラテとホットココアを注

文し、奥まった四人席を取り、席に行く道中で依子はスティックシュガー三本ほど取っていた。依子はココアに砂糖を入れ、一口飲んで、それから深く細く息を吐いた。まるでそれまで水中に潜っており、やっと息継ぎができた、というような風貌で、その呼吸音でヤスキの緊張が途切れた。依子にとって映画とは気力を消耗させられるものだった。映画後の疲弊した身体に栄養補給をするためのものだと言って、依子はココアに甘ったるくなるほどの砂糖を入れていた。ヤスキは依子が喋り始めるのを待ったが、依子は空になったスティックシュガーの抜け殻を右手で無意識に弄びながら、眼差しはどこか宙に浮かべて言葉を探していた。ヤスキはピアノのハンマーのように揺れ動く依子の指たちを、そしてそれらに咀嚼される細長い紙切れを見つめていた。もう一口、さらにもう二口飲んだ後に、やっと依子は第一声を呟いた。

「ストーリーはイマイチだったけど音楽は良かった」そしてまたすぐに一口飲んだ。スティックシュガーの抜け殻はシワだらけになって指に弾かれ、テーブルの上に転がされる。それから二人で劇件についての議論を行い、ストーリーに関する粗探し、叩きを行い、最後に監督自身の作家性について考えた。二人で観た映画はすぐに議論を交わす。それもまた、いつもやっていったことだった。

依子の語りは常に熱を感じられないものの、しっかりと地に足をつけた、芯がとっている。対してヤスキの喋りは話題に対して正確な答えを提示することができていたが、そこには本心の隙間を縫い歩いているような怪しさがある。しかし依子に限らず、その怪しさを感じ取ることでできる者はいないだろう。ヤスキ自身だけがその怪しさを感じていた。その違和感がヤスキを空回りさせ、それでも会話は辺りが暗くなるまで続いた。話しているうちに、ヤスキには一つずつ、わからないものが増えていった。

結局依子は店を出るまでにココアを三杯飲んだが、ヤスキはカフェラテ一杯で済ませた。一口飲むたびに間が開いたので、コップの側面には地層のように段々と模様がついていた。外は昼間のような暑さが抜け、日没前特有の暗い寂光に照らされながら駅まで歩いていった。改札口の前で依子とヤスキは別れる。一人改札を通った依子へ、ヤスキは声をかけて引き止める。依子は疲労が抜けきれない顔を数秒前に立っていた場所へ向けた。

「また今度観に行こう、同じやつを」そうこうしている間にも、ヤスキの頭は気力をすり減らし、ますますわからないことが増えていったが、最後の力を振り絞って彼はわかることだけを言葉にしていた。

「つまらないやつをもう一回見てどうするのさ」

「今度は君の話をしよう」ヤスキの言葉に一日中眠たそうだった依子の目はほんの少し大きく開かれ、ついにはふっと息を漏らして笑った。そのまま互いに手を振って、今度こそ別れた。依子は背を向け、歩き、階段を降り、やがてヤスキの視界から消えていった。それからヤスキも自分の帰る路線へ歩き始めた。駅のホームの雑踏の中で、依子は別れ際になぜ自分が笑ったのかわからなくなった。線路を視線でたどり、ホームが途切れたその先の夜景を眺めながら考えたが、しかしそれでもわからなかった。

ヤスキは電車の座席の端で沈黙を深めていった。ヤスキにはますますわからない判然としたものが増えていった。一日に起きた出来事を辛うじて思い出しながらも、気力がなくなっていく。そして映画の名前を忘れたところで集中が途切れ、気づかないうちに眠っていた。目覚めるのは、夜もより一層ふけている頃だろう。